

次号予告

とびら	七沢病院	横山 巖
特 集＝訪問指導とその問題点		
地域医療の問題と P T・O T の役割	洞爺協会病院	三島 博 信
家屋改造と職場訪問について	兵庫リハセンター	原田 ふみ子
在宅脳卒中患者の訪問指導	市立むつ病院	松本 幸也
座談会／訪問指導とその問題点	都養育院	松村 秩他
講 座		
対談／P T・O T と研究 (2)	東京病院	砂原 茂一
	東大	上田 敏
フィンガーペインティング (5)	九大	内村 静子
海外だより		
海外体験をふりかえって		
——米国における精神科作業療法とその背景——	九州リハ大	高田 幸
Q and A	A: 大阪心障センター	田村 春雄
	Q: 府中リハセンター	鈴木 明子
メディカルプロGRESS	東大	上田 敏
	都養育院	荻島 秀男

編集後記

1974 年の 1 月号をお届けする。早いもので本誌ももう第 8 巻となり、子供なら小学校 2 年生にまで育ったわけである。この前の 11 月 20 日には清瀬のリハビリテーション学院の 10 周年記念の式がおこなわれたが、日本の P T・O T 教育の 10 年の年輪をきざみ、ようやくここまで来たかという感を深くした。ふりかえれば、本誌の発刊の話し合いが始まったのは 1966 年の第 1 回国家試験の直後で、まだ P T も O T も協会ができていない頃であった。発刊の準備と平行するようにして、その年の秋には両協会が生まれ、本誌と両協会との協力関係もうまくできて、1967 年初頭から第 1 巻の発行がはじまった。第 1 巻は季刊であったものが、すぐに第 2 巻からは隔月刊になり、昨年の第 7 巻からは月刊になった。まさにいちじるしい成長である。日本経済の高度成長は公害・インフレ・物資不足のひずみをもたらしたが、本誌の成長はそのようなこともなく素直に喜んでよいと思う。月刊化に伴って執筆陣の層の薄さが露呈しないかとの危惧の声も聞かれたが、過去一年の実績はそれが全くの杞憂であったことを示していると思う。

さて月刊化 2 年目を迎えて本号からはいくつかの新しい試みをおこなってみた。2 年間連載の荻島先生の英語講座(ごころうさま)の後をうけて「Q アンド A」、「メディカルプロGRESS」、「本の紹介」をカラーページにまとめ、気軽に読めるコーナーを狙ってみたし、「チームの中の P T・O T」というシリーズ(必ずしも毎号ではないが)のトップとして、座談会で「リハ病棟における P T・O T とナースの関係」をとりあげた。このシリーズでは今後 P T・O T と医師との関係をはじめ、チームワークの上での問題点を順次とりあげていく予定である。

本号からはその他、本誌の発刊当初から最近まで編集委員長格で手ずから本誌を育てて下さった砂原先生に「研究のしかた、あり方」をうかがうシリーズ(4 回の予定)がはじまった。対談形式の講座というのも異色だが、お忙しい砂原先生にお願いするにはこの形式が適していたし、固い論文とはまたちがった肉声に触れる感じも時にはよいのではあるまいか。聞き手としては啓発されるところの多いお話で、実に充実した時間を持ったことに感謝している。

最後に、養護学校における P T・O T のあり方と関係して問題の多い養護訓練について行き届いた説明をいただいた小池先生をはじめ、御寄稿いただいた各先生方に厚く感謝したい。(上田敏)

編集顧問

天 児 民 和
九州労災病院長
五味 重 春
府中リハビリ学院長
砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長
津 山 直 一
東京大学教授・整形外科
(五十音順、以下同じ)

編集委員

上 田 敏
東大リハビリ部
荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部
佐 藤 馨
神奈川リハセンター
鈴 木 明 子
府中リハビリ学院
谷 岡 淳
自治医科大学
田 村 美枝子
リハビリ学院
寺 山 久美子
都心障センター
松 村 秩
都養育院リハビリ部

編集同人

明 石 謙
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
大 橋 博
鎌 倉 矩 子
紀 伊 克 昌
駒 沢 治 夫
佐 藤 剛
田 原 澄 彦
富 岡 詔 子
奈 良 勲
藤 沢 しげ子
藤 本 欽 也
前 田 守
松 本 妙 子
矢 谷 令 子
山 下 隆 昭
横 山 巖
和 才 嘉 昭

(担当 細田・岩元・松橋)